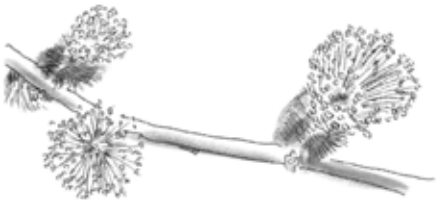
第五十四回　一年通観（一）

敷地内の樹木の位置を地図に落としてわかったことがいくつかある。まず驚いたのは私が敷地として認識していたのは全体の四分の三くらいだったことだ。ちょうど魚眼レンズで敷地を上から見たような感じで、家の周りが実際より広く見え周りはほとんど知らない世界だったのだ。調べたのは雪解け直後だったので敷地の隅々まで足を踏み入れることができたが、六月ごろになると、根曲がり竹が勢いを回復して視界も遮るし入るのも拒まれる。そのエリアが結構広いのだ。根曲がり竹を刈り取ってしまえば一段と敷地が広く感じるようになるのは確実だった。だが、樹木調査中にそこに鳥の巣があることがわかったのだ。確かに茂った根曲がり竹の方から鳥の鳴き声も聞かれる。敷地として認識していなかったところは鳥たちの生活で重要なところだったのだ。

もうひとつ、樹木の位置と樹種がわかったことで、季節がかわるごとに「あの木はどうなったかな」と見に行くことができるようになった。ただ木が生えていただけだとそのような気持ちにならなかったと思う。一年を通じていろいろな植物がどのように変化して行くのかを自分のペースで観察することができる。今まで考えたこともなかった贅沢だ。

最初に気になったのはバッコヤナギだ。これは前に触れたように雪解けすぐに葉が出ないうちに花を咲かせる。花といっても繭のような形に花が密集している。緑色をしたのと白い毛がふさふさしたのとがあるので良く見て見ると二本の木が絡み合ってそれぞれ違う花をつけていることがわかった。図鑑によると雄の木と雌の木のようだ。白いふさふさした方は、時間が経つと先端が黄色になってきた。雄の木で花粉がしっかりできてきたのだ。雌の木の方はだんだん細長く大きくなって先の尖ったそれぞれの小さな花の形がはっきりわかるようになってきた。その頃になると黄色く一際目を引いていた雄の花は茶色く小さなくくちゃくちゃの塊になってしまう。雌の花は尖った先が綿毛のようになりどんどんその数を増してきた。やがて綿毛は膨らみバラバラになり小さな種を抱えて風に飛ばされて一仕事を終えることになる。それが四月半ばから六月半ばにかけての出来事だった。

六月になってからはクリを観ることにした。クリは白い鎖状の花やイガグリは見たことがあるが、その間がどうなっているのか詳しくは知らなかった。白い花はいつ頃咲くのだろうと思っていたら、六月の半ばにはもう鎖状の蕾ができていた。このころはつやつやとした立派な葉に押されて目立たないのだ。やがて蕾が開くと良く見る白い鎖状の姿になる。たくさんのつぶつぶからイガのように無数のツノが出ているのだが、どれがあのクリの実になるのだろう。図鑑を見るとこれらは皆雄の花のようだ。ではどこに雌の花があるのか。それは鎖状の雄花の根元にできるのだ。全ての雄花の根元にできるわけではなさそうだが、良く見ると根元にぷくっと一段と大きな塊がある。やがてそれがイガのようにトゲトゲした塊になってくるのだが、そこからさらに白いトゲトゲした花を咲かせるのだ。そして雄花は茶色く枯れて行く。